

ルーチェ

エドマンズ公爵家の令嬢。
自身が「乙女ゲームの悪役令嬢」
であることに気づき、
婚約者のエアスを置いて
豪華客船での逃亡の旅に
出るが……。

エアス

アウレリア王国の第一王子で、
ルーチェの婚約者。
誰に対しても優しく、ルーチェにも常に
紳士的だが、特別な恋愛感情は
一切見せない“塩対応”を
貫いている。

Contents

プロローグ + ルーチェは前世の記憶を取り戻した	004
第一章 + ルーチェは冷えたフリをする	012
第二章 + 出航	038
第三章 + 船上での生活	069
第四章 + 近くなる距離	096
第五章 + 離れない距離	121
第六章 + 船、それは密室	146
第七章 + ルーチェは流される	171
第八章 + ドロロシアの夜	212
第九章 + ルーチェの再出発	241
エピローグ +	266

プロローグ ルーチェは前世の記憶を取り戻した

「エリアス様……どうか、今夜……私を抱いて、ください」

華やかなワルツが流れ、シャンデリアが星のようにきらめく舞踏会のホールを背に、ルーチェ・エドマンズ公爵令嬢は婚約者であるエリアス王子に肉体関係を迫っていた。

「……ルーチェ」

おおよそ公爵令嬢とは思えないはしたない言動に、エリアスも濃紺の双眸をわずかに曇らせている。それに気が付かないルーチェではないが、彼女は怯まない。

——今夜こそ、エリアス様の腕の中にこの身を委ねるのよ。

ルーチェが王子に対して甘ったるい声で愛を囁くのは日常茶飯事だが、今宵の彼女はひと味違う。

胸元が大胆にカッティングされ、豊かなふくらみが強調されているドレスは決意の証しだ。

「それは……だめだよ」

自他ともに認める美女——しかも身元の確かな婚約者に誘惑されている。

にもかかわらず、エリアスは情熱的な視線をルーチェに向けることはない。

ああ、いつも通りね。

とルーチェは頭の端でちらりと思う。

エリアス・オーウェン・アウレリアは完璧な王子である。

アウレリア王国の第一王子として生まれた彼は健やかに、そして品行方正に育つことを周囲に求められてきた。

その期待に応えて、彼はいつだって理想通りに振る舞った。

真面目で穏やか、礼節を欠かさず、男性特有のギラついた欲望をにじませることもなく、ルーチェに対しても常に紳士的だ。

問題は、エリアスのルーチェに対する優しさは全ての人々に等しく向けられているものと同じで、婚約者としての特別ではない、ということだ。

ふたりは幼いころからの婚約関係——やがては政略としての婚姻を結ぶ間柄だ。

ルーチェがエリアスに向ける感情は本物で、かけがえない唯一無二の相手だと信じている。

一方エリアスはいつも微笑んではいるものの、その瞳の奥に熱はない。

まるで義務のように手を取り、形式的に名を呼ぶ。

自分だけが婚約者をひとりの人間として一方的に好いていて、必要とされているのは婚約者の立場だけ。

そのみじめさが、長年ルーチェを悩ませてきた。

「ど、どうしてですか……私は政略にかかわらず、あなたを愛しています。それなのに……」

ルーチェは身を震わせながら、ありったけの勇気を振り絞って言葉を吐き出した。

今夜の暴挙ともいえる言動がどれほどの決意を伴うものか、ルーチェの火照った頬と涙で潤んだ瞳

が物語っている。

「……それは……」

ルーチェがぐっと一步を踏み出すと、エリアスはしぶしぶといった様子で口を開いた。明るく出ていた月が陰ったせいもあるだろうが、エリアスの深い青の瞳はまるで曇ったガラス玉のようで、情事の高揚感などかけらも感じられない。

それがルーチェには自分の空回りを突きつけられていて、つらいのだった。

「僕は……ルーチェのことを、誰よりも大切に想っている」

歯切れの悪い言葉は、なんだか苦しそうにルーチェには聞こえてしまう。

「なら……!」

言葉を遮るように、エリアスはルーチェの艶やかな紅を引いた唇にそっと人差し指を当てた。

「まだ、できない。君と僕は婚約者だけれど、結婚前。君を大事にしたいから、そういうことは……」

「けれど、私とエリアス様は将来を誓い合った仲ではないですか」

ルーチェからすれば「必ず結婚するのだから、四の五の言わず抱いてくれ」というところだ。

自分は薄っぺらい薄絹のカーテンのような言葉ではなく、今すぐに愛の証しが欲しいのだと迫った。全身ですがりついてくるさまを、エリアスはたしなめることもない。

臆病なのか、それとも本心では嫌なのか。それすらわからない王子は川べりの葦のようで、流されそうなのか、そこから動かないのか、どちらともつかない煮え切らない態度がルーチェをさらにやき

もきさせるのだった。

「もちろん。君と夫婦になれるその日を心待ちにしているよ」

「だったら……!」

ルーチェは言質を取ったとばかりに、勢いよくエリアスの胸に飛び込んだ。

その拍子に、ルーチェの瞳からは大粒の涙がぼろりとこぼれた。

「どうして……」

自分を欲しいと言ってくれないのかと、明るい緑の瞳からはとめとなく涙があふれてくる。

成人の儀を終えたルーチェは立派な令嬢、そして大人の女性として世間では扱われている。

「ルーチェ、落ち着いて」

それなのにエリアスはこうしてなだめるだけで、ルーチェに男女が行うような情熱的なキスのひとつも返してくれない。

どんなに他人から美人だと、王子にふさわしい令嬢だと褒めそやされたところで、自分が向けるような感情をエリアスが返してくれないのが不満だった。

彼はいつも、真面目を装ってこういうふうなのらしくらりとかわすのだ。

ルーチェはそれがどうしても、納得できない。

たとえばふしだらと世間に罵られたって構わない。

ルーチェが欲しいのは未来の王妃の座ではなくて、エリアスの心だ。

「僕は嘘をつかないよ」

君のことを本当に大切に思っているんだ、とエリアスはルーチェの耳元で囁いた。

「言葉だけなら、どうとでも言えるではないですか……！」

ルーチェはエリアスの甘い囁きを振り払うように、少し顔をそむけた。エリアスはそんなルーチェの小さな顎をつまんで、くいつと自分のほうに向かせた。

「一体、今夜のルーチェはどうしたんだい。国で一番素晴らしい令嬢と呼ばれる君らしくもない」

「私、不安なんです……」

「不安？」

「エリアス様が見てくれなくて、そのまま他の女性に心を向けてしまう。そんな夢を、最近よく見るのです」

「……僕がそんなことをするはずがないだろう？」

エリアスの言葉には確証がこもっていた。

「未来の王妃、そして国母になるという重圧は君にしかわからないものだ。疲れているからそんなことを……」

エリアスは慰めるようにルーチェのなだらかな肩を撫でた。

しかしルーチェはふるふるとして首を振る。

「いいえ、夢のせいだけではありません。私はずっと、いつかエリアス様が私に背を向けて、どこかに行ってしまう……そんな思いに囚われているんです。だから、どうか。今夜、おそばに置いてください」

「……わかったよ、ルーチェ」

エリアスはほんの小さく息を呑んでから、応えた。

「エリアス様……！」

その一言にルーチェの胸は高鳴った。

エリアスが優しい手つきでルーチェの頬をそっと包み、顔を近づけた。

月明かりに照らされたエリアスの青い瞳には、確かに感情の色があって、ルーチェは自分が本当に愛されているのだと思った。

その瞬間だった。

「エ……」

高揚する気持ちが抑えられずに、再び愛しい人の名前を呼ぼうとしたそのとき、なんの前触れもなく、雷に打たれたかのような感覚がルーチェに襲いかかった。

体がびくりと跳ね、硬直する。それと同時に、頭の中に他人の記憶が流れ込んでくる。

知らない世界、知らない人たち、けれどそのひとつひとつがなんなのか、誰なのかはわかる。

情報が濁流のように押し寄せる中、ルーチェはそれが「かつての自分」であることを認識した。

そして、記憶の中の「自分」が持っている長方形の板に映し出された、見慣れた姿。

平べったい絵になったルーチェは、怒りに目を吊り上げてこう叫んでいる。

『どうしてですか、エリアス様！ そんな女に……あなたの婚約者は、私なんですよ！』

——私は、悪役令嬢だ。

そのとき、ルーチェは自身の運命を理解した。

——ルーチェ・エドマンズは、私がプレイしていた乙女ゲームの悪役令嬢と同じ名前。どうして、今の今まで忘れていたのだろう。

「ルーチェ？」

婚約者の異変を察知したエリアスの問いかけも耳に入らない。

ただ、ルーチェは呆然と月明かりに照らされたエリアスの顔を、長年の幼なじみでもある王子の顔を、じっと見つめることしかできない。

——ああ、エリアス様のお顔って、ゲーム画面のstuhlで何度も何度も、穴が空くほど見つめた顔と同じだわ！

馬鹿馬鹿しい妄想だと一笑に付すには、その「記憶」はあまりにも鮮明だった。

ルーチェはぱちぱちと瞬きを続けた。

その緑の瞳をエリアスは不審そうに、けれど興味深そうに覗き込んでいる。

——私は確かに、この人を一心に慕っていた。それは真実で、記憶を取り戻した今も変わらない。でも……この恋は決して叶わないし、そして破滅への一本道。

今、前世の記憶を取り戻したこと。それはつまり魂からの警告に他ならない。

ルーチェはそう確信した。

——エリアス様の心は私にはない。今までも、これからも。それなら私は、せめて——この運命から逃れなければ。

「や、やっぱり……いいです！」

ルーチェは声を張り上げながらエリアスの腕の中で仰け反り、白い手袋をはめた手でエリアスの口を塞いだ。

「ルーチェ!？」

エリアスが驚いたように目を見開くのがわかったが、もうルーチェには彼の珍しい様子を眺めて喜ぶ余裕はどこにもなかった。

顔をそむけ、身をよじり、エリアスの腕の中から逃れる。

「ごめんなさい、エリアス様。先ほどの、ナシでお願いいたします！」

「ルーチェ、待ってください！」

その肩に、エリアスの言葉が降ってくる。

「いいえ、待てません！ ごめんなさい！」

どうせ彼は自分を愛していないのだし、怒られたって今さらどうってことはない。

そうしてルーチェはエリアスの制止も聞かずにバルコニーを飛び出し、ホールを突っ切って一目散に逃げ出したのだった。

第一章 ルーチェは冷えたフリをする

——まずい、まずい、まずいっ！

ルーチェは脱兎の勢いで舞踏会の場合を抜け出し、馬車に飛び乗り、公爵家の屋敷へと戻ってきた。広い玄関を駆け抜け、侍女の問いかけも無視してドレスの裾を抱えて階段を駆け上り、部屋にかかっている大きな姿見に飛びつくようにして自分の容姿を確認する。

緩く巻かれた艶のある栗色の髪に、明るいグリーンが印象的な瞳。

広く開いたデコレテのドレスと「ここに注目してください」と言わんばかりに主張する胸の谷間。

まさしく、何度もスマートフォン画面で見た通りの外見だ。

「やっぱり、間違いなく私が悪役令嬢のルーチェよね!？」

ルーチェは一声叫んだあと、大急ぎでドレスを脱ぎ捨て、薄絹の肌着一枚で勢いよくベッドに倒れ込んだ。

「ああ、もう、本当に、どうして、どうして今まで忘れていたのよ……!？」

もしゲームの通りにこの世界が動くのならば、ルーチェの今後の人生はお先真っ暗と言えるのだ。

ルーチェは枕に顔を埋めながら「悪役令嬢ルーチェ・エドマンズ」の転落人生について思いを馳せる。

彼女は悪役であるものの、その小物ぶりは当て馬と表現したほうが正しい。

ゲームのストーリーはアウレリア王国の王子『エリアス』が原因不明の病に倒れ、どんな医師にも治せないとい匙を投げられてしまったところから始まる。

息子を溺愛する国王夫妻は藁にもすがる思いで世にも不思議な聖なる癒やしの力を持つヒロイン・クロエを城に呼び寄せ、彼女はその期待に見事応えてみせる。

というのがゲームの序盤で、エリアスを治療した聖女、という肩書きによって他の攻略対象たちが彼女に興味を持つ。

エリアスは最初こそクロエに冷たく接するが、治療の過程で彼女に心を許していく。

彼はゲームの中でも序盤でエンディングの条件を満たすことができる「チョロイ」攻略対象だ。

「エリアスルートは難易度が低くてほとんどチュートリアル、ね……」

しかし、当のルーチェときたら、十年かけてもエリアス王子の心を動かすことができていないのが現状だった。

エリアスがチョロイのはヒロインに対してだけなのだ。

「ううっ」

ルーチェは腹の中のもやもやを吐き出すように呻いた。

エリアスに抱いていた想いは、婚約者としての義務や建前ではない。

もっとずっと根深くて、強くて、切実な「恋」だったことには間違いがないのだ。

前世の記憶を取り戻したとて、その気持ちは変わらない。

ささいな一言で浮かれたり、沈んだり。王子としての彼ではなく、幼なじみとしてのエリアスを一

途に愛して、愛されようと努力していたつもりだった。

いつも彼のことを考えていたはずなのに、いつしか彼が何を考え、何を望んでいるのかがよくわからなくなってしまうと、ルーチェはずっと苦しさを抱えていた。

「……だから、すがってしまったのより……!」

婚約者という立場に感情を支えてもらっていた。

結婚すればいつかは自分のものになってくれるし、心を開いてくれると信じていた。

けれど最近わけもなく不安になることが多くなってきた——今思えばそれがいわゆる「虫の知らせ」だったのだとわかるのだが——こみ上げてくる理由のわからない焦りに突き動かされて、ルーチェはエリアスと肉体関係を持ち、既成事実を作ってしまったおうと強攻策に出たのだった。

「はあく……だから手を出されなかったのかあ」

ルーチェは手慰みに、豊かな胸のふくらみを軽く揺らしてみた。

これまではエリアスが地球ならば、ルーチェは月だともいうふうにぐるぐるとエリアスの周囲をうろつき、彼が執務室にいれば「お茶の用意を」と称して入り浸り、昼食ときには「一緒にしても?」と甘えるように隣の席を確保し、舞踏会や社交の場では決まって彼の腕にしがみつこうようにして登場するのが常だった。

もちろん公爵令嬢であるルーチェを差し置いて、エリアスの隣に立とうと画策する令嬢などいやしないし、エリアスに邪険にされたこともない。

ルーチェは婚約者の身分にあぐらをかかず、エリアスに日々重い愛をぶつけていた。

しかし、その努力が実ることはなかった。

そうして今夜。ルーチェはこの世界の真実を——自分と彼が結ばれる未来がないと知って、心がぼきりと折れてしまった。

もちろんゲームでも、ストーリー開始前の段階でエリアスとルーチェは婚約している。

けれど、それは本人の意志によるものではない。

エリアスの心は最初からルーチェにはないのだから、誰と結婚するかは王子の心次第なのだ。

「……このまま気が付かなかった場合、私は……」

ゲーム中の『ルーチェ』も、エリアスに愛されたくて必死だった。

だから病に倒れたエリアスに何もしてあげられず、しかも突然現れたヒロインがエリアスの心を動かしたことを理解はすれど納得はできなかった。

嫉妬に狂ったルーチェはヒロインに対して怒りを暴走させ、様々な嫌がらせを繰り返す。

最終的にはエリアスの手によって貴族社会から追放され、修道院送りになる。

そのイベントでの、エリアスの最後の台詞はこうだ。

『ルーチェ、君は疲れているんだ。貴族たちの目のない静かなところで少し休むといい……』

そこで悪役令嬢の出番はおしまいで、それ以降エリアスはルーチェに言及することはない。

「あゝもう、最後までルーチェには塩対応なんだからっ!」

おぼろげな記憶の中のエリアスに苛立ったルーチェが枕を叩くと、ぼふっと鈍い音がした。

「まあ……美人でおっぱい大きいからとりあえず揉んでおこうか? とか思う人じゃなかったのは、

いいことなのかもしれないけど」

エリアスは簡単に攻略できてしまう——つまり、ヒロインがどのルートを通ったとしても彼はヒロインに心を傾けるので、ルーチェは必ず彼女に対して怒りを向けることになる。

破滅する悪役令嬢の道からはどうやっても逃れられないキャラクター、それが彼女なのだった。

「とにかく、今までエリアス様にふさわしい女になろうと努力していたのは全て、無駄だったというわけよ、お馬鹿なルーチェ」

常に研鑽を怠らないエリアスについていくためにルーチェもお転婆な自分を封印して、必死に王妃教育に食らいついてきたつもりだ。

それなのに、エリアスときたら「ルーチェは本当にすごいね」「公爵家も末娘がこんなにも優秀だと鼻が高いね」「僕もより一層努力しなくてはいけないな」なんてことを、ギリギリ無表情ではない程度の、ほんのわずかに口角を上げた微笑みで言うのだ。

前世でも今世でも処女なのに、男性をベッドに誘うなんて大それた行動を起こしたのは、そんなふうに距離を取られなくなかったからだ。

一瞬だけうまくいきそうな雰囲気はあったが、ルーチェはもう信じない。どうせエリアスはルーチェの顔にでも口づけてお茶を濁すつもりだったのだ。

「いや、あの状況ならせめて唇は奪えたかも……いやいや、だめ。もうだめ。……諦めなさいよ、ルーチェ」

彼女の頭の中では、エリアスへの未練がある令嬢としての自分と、彼から逃げなければという警告

を発する前世の自分とがどったんぱったんと取っ組み合いをしている状態だ。

「とりあえず、私はもう、何もしてはいけない。無害なまままでいなくては」

ルーチェが出した声が天蓋に反響して、うつろな音を立てた。

「今ならまだ、悪役令嬢としての未来を回避できる可能性だってあるはずよ」

問題点はルーチェがエリアスへの叶わぬ恋に狂ったことだ。だから感情を抑え込めばいい。前世の記憶を取り戻した現在のルーチェなら、十分に可能なことだ。

エリアスは真面目な王子だ。彼の魂がルーチェは運命の人ではないと警告を発し続けていたのだろう。だから自分もそうすべきだ。

「諦めるしかないのよ。私が悪役令嬢に生まれてしまった以上は——そうするしかないの。今度はこっちが、塩対応する番よ」

王子に捨てられる前に——こちらから捨てるしかない。それがルーチェの導き出した、ハッピーエンドへの答えだった。

『親愛なるルーチェ・エドマンズ様へ』

ルーチェは手のひらの中にある手書きのカードを眺めてため息をついた。

芳醇な香りが漂う朝摘みのバラの花束はエリアスからの見舞いの品だ。

それに差し込まれた手書きのカードを、ルーチェは長年の習性で丁寧にノートに挟み込んだ。そこ

には今までにエリアスがくれた手紙やカード、果ては観劇のチケットや外遊先から送られてきた絵葉書なども収納されている。

「はっ！」

流れるような手つきでノートを閉じてから、ルーチェは我に返った。

エリアスから距離を取るつもりが、ついつい花が贈られてきたことに嬉しくなって普段通りの行動をしてしまったのだった。

「だめよルーチェ、もっと『塩対応』をしなくてはね」

そう自分に言い聞かせてから、ルーチェは再びベッドに潜り込んだ。

記憶を取り戻した舞踏会の夜からもう一週間が過ぎている。

ルーチェはその間ずっと「張り切って露出の高いドレスを着たせいで体が冷えてしまいました」と仮病を使い、屋敷に引きこもっている。

（こんなことをしていても、刻一刻とゲームのストーリーが始まる時が近づいているわけだけと……）

ルーチェがため息をつくとき、控えめなノックの音がした。

「どうぞ〜」

ルーチェが気のない声を上げると、ベテランメイドのタバサが気まずそうに入室してきた。

「タバサ、その辛気くさい顔はどうしたの」

彼女とは十年以上の付き合いになるが、いつも明るくて人懐こい。

けれど今は少し緊張した面持ちで、それがルーチェの背筋をわずかに伸ばした。

「エリアス殿下がお見舞いにいらっしやいました」

「……げほっ！」

事前連絡無しの子の来訪など公爵家とはいえめったにあることではなく、思わずルーチェの喉から令嬢らしからぬ音が出た。

「ど、ど、どうして」

「どうしてと申されましたも、それはもちろん、お嬢様の様子をご確認に……」

当然タバサはルーチェが仮病を使っていることを認識しているから、丁寧な口調とは裏腹に、視線には多少責めるような雰囲気がある。

「エリアス様は真面目でいらっしやるから……何かのついでに公爵家の前を通って、ついでにお見舞いに来られたのね」

彼にとって自分の存在は「王子でいるためのノルマ」のようなものだろうとルーチェは認識している。

名家であるエドマンズ公爵家の次女で歳も同年代、美女と表現して差し支えない容貌、王子にベタ惚れで問題を起さないとすれば、特に冷遇する必要はない。

もっとも向こうはルーチェを熱烈に好いているわけではない。

十を過ぎたところからのエリアスの態度は冷淡なもので、彼はもっぱら自分自身を高めるために労力を割いているようにルーチェには見えていた。

「もちろん、お通ししてよろしいですよね？」

「お会いしないわ！」

ルーチェのわざとらしい咳をしながらの返事にタバサは小さくため息をついて、ポケットから一枚の紙を取り出した。

手帳の切れ端か何かなのか、小さく畳んである。

「それ、何？」

「殿下からお預かりしました」

「お手紙？」

ルーチェは手を伸ばしたが、タバサは紙切れを渡してこなかった。

「これは私がいただいたものです」

「と、どうということ!？」

まさかエリアスの本命はヒロインのクロエでもなく、自分でもなくタバサだったのでだろうか!？ とルーチェはおののく。

「お嬢様がお会いしないと返事をした場合の指示が書いてあるそうです」

そう言って、タバサは神妙な顔で紙を開いた。

「な……何よ、それ！」

「おほん。では読み上げさせていただきます。『ルーチェが僕に病をうつすことを懸念して面会を断った場合は、バルコニー越しでの対面を希望する』だそうです」

「……へっ」

王子のお見舞いに対して、感染症をうつしてしまうからと面会を断るのは別に不自然なことではない。

エリアスも形式的に公爵家に連絡を入れただけで、断られたらこれ幸いと引き下がり、まっすぐに王宮に戻るものとルーチェは思っていた。

「そ、そんなわけないわ。タバサは知らないかもしれないけれど、エリアス様はともお忙しいのだから、もういるはずがないとルーチェは自分に言い聞かせる。

馬車でふたりきりだと浮かれて、何度気まずい思いをしたかわからない。

最近ではルーチェも知的な自分を演出するために馬車の中で本など読んでいたので、お互い様なのだ。

「しかし、お嬢様がお顔を見せてくださるまで待つからと」

タバサの言葉に、ルーチェは耳を疑った。

「え……!! つまり、今もいらっしゃるの?」

「はい。客間にご案内しようとしたのですが『庭でいい』と。……お会いにならないというのは、不敬にあたるかと」

「わ、わ、わかっているわよ」

じっとりとした目で見つめられて、ルーチェはのろのろと起き上がった。

(そこまでして私の様子を窺うって、一体どういう風の吹き回しなのかしら……)

ルーチェは手ぐしで髪の毛を整えながら、おそるおそる窓から緑豊かな公爵家の庭園を覗き込んだ。

「ルーチェ！」

「きゃっ！」

顔を出した瞬間に目敏く発見されてしまった。

王子と貴族令嬢の間柄、私室に招くような関係ではないけれど、エリアスはルーチェの私室の位置を把握しているらしかった。

ルーチェは一旦頭を引っ込めてから、おそるおそるまた顔を出した。やはり、エリアスは部屋の真下に待ち構えるようにして立っていた。

「ルーチェ！」

よく手入れされた公爵家の庭園を背に、ルーチェに向かって腕を広げるエリアスはこれまでの塩対応な王子とはまるで違う人間に見えた。

「エ、エリアス様……わざわざこんなところまでご足労ただかなくても……」

「どうしても、君の顔が見たくて」

「えっ」

その発言に、顔が赤くなった。

(きゅ、急に、何!?)

ルーチェは心臓がばくばくするのを止めることができない。

可愛いか綺麗といった褒め言葉を言われたことは何度もあるのだが、なんだかその言葉は実感を持ってルーチェに響いたのだ。

「心配だったんだ。その……急に帰ってしまうし……『よくない別れ方』をしたから」

「あ、あのときは、そうですね……すでに、熱があったんだと思います。だから……」

「たとえ夏でも、夜は冷えるから。今度からは露出の多いドレスは控えたほうがいい」

ルーチェの脳裏にふと、エリアスの過去の振る舞いがよぎった。

いつかの夜会、身につけたドレスの背中の中のホックをわざと外しておいたことがあった。

ほんの少しでいい、彼の手が触れてくれたらそれで満たされると思っていた。

よしんば、婚約者の新鮮な反応を引き出すことができたなら——そんなもくろみもあった。

だがエリアスはルーチェのうなじのあたりを一瞥しただけで、照れるでもなくすぐに自分の上着を脱いでルーチェの肩に掛けた。

そして静かに言ったのだ。

「侍女を呼ぶよ」と。

そうしてルーチェの作戦は失敗して、その夜はみじめさに枕を濡らすはめになった。

(あのとときのエリアス様は、天然なのだと思っただけね。今思えば、あれも一種の拒絶ということね)
好きでも嫌いでもなく「気にしない」というのはそれはそれで罪なことだとルーチェは思う。

だから、エリアスがルーチェを急に気にかけて始めたように見えるのは、おそらく次期王位継承者としての危機管理の一環——自分の評判を落としかねない、様子のおかしな婚約者を監視しているだけだろう。

今さら気にされたところで、どうせ結ばれることはないから、実質自分はどうも、婚約者ではない。そう思うと、すんなりと作り笑顔をすることができた。

「ええ、気を付けます。三日後の会食には、厚着して参加します」
最近のルーチェは大人だからとぼちちりと濃いめの化粧をするのが常で、殿方にすっぴんや洗いざらしの髪の毛を晒すなんてとんでもないと思っていた。けれどもう気にしない。

好かれる必要なんてないからだ。

「……そうか、わかった。また一緒に過ごせるのを楽しみにしているよ」

エリアスはルーチェに向かって微笑んだ。その顔はルーチェにとって、「元のエリアス」——つまり作り笑いに見えた。

「はい。エリアス様も、お見舞いありがとうございます」

ルーチェに背を向けたエリアスが険しい顔をしたのは、もちろんルーチェからは見えていなかった。

エリアス来訪の三日後。ルーチェは鏡に向かってキリリとした表情を作っていた。

今日は他国から遊学にやってきている有力貴族の子女たちとの交流会が開かれる。

そこまでかしまった場ではないから、病み上がりのルーチェが復帰するにはちょうどよい機会だった。

ここ最近ずっと塞ぎ込んで、ぶつぶつと意味不明な独り言をつぶやいていた主人がかつてのようなしゃんとした様子を取り戻したのを見て、タバサはほっと胸を撫で下ろしていた。

「お嬢様、もうすっかり良さそうですね」

「ええ。充電完了よ」

「じゅうで……申し訳ありません、それはどのような意味で」

「な、なんでもないわ」

ルーチェは鏡越しにごまかすように微笑んでから、ブラシを自ら取り上げて淡い栗色の髪をさらりと梳いてみせる。

「大丈夫、私は絶対好調よ。ご心配なく」

「はあ」

タバサは首をひねったが、それ以上は追及しなかった。

エリアスとの別れを決めたとしても、その日が来るまでは、距離をとりつつあくまで穏便に令嬢として、そして王子の婚約者として振る舞うつもりだった。

もう、彼を追わない。それだけでいいのだ。

ルーチェは鏡に映る自分の姿をじっと見つめながら、静かに決意を新たにす。

「なにはともあれ、お元気になっていただけでほっとしました」

タバサは鏡越しに、にやりと歯を見せて笑った。

含みのある笑い方は、仮病をからかわれているのだと付き合いの長いルーチェはもちろん理解しているが、気分を害することはない。

「成人したから、これからはもっと大人なドレスを着るのよ！ とせっかく張り切っていらっしやっただのに、先日の夜会で気分が沈み込むような何かがあったのかと心配しておりました」

「そんなわけじゃないじゃない。エリアス様が一緒だったのよ」

そう、エリアスは何もしていない。ルーチェが変わったただけだ。

「早く元気なところを殿下にも見せて差し上げませんと」

「ま、まあね」

「もし今夜、遅くなるようでしたらタバサがお手伝いいたしますよ」

室内には誰もいないが、タバサはそっとルーチェに耳打ちした。

「……な、ないわよ」

もう今までの関係には戻れない、ましてや進展などありえない。

あのとときのルーチェは、本当に意味もなく追い詰められていた。

嫁入り前の、しかも乙女が王子をベッドに誘うなんて貴族令嬢としてありえない暴挙だ。

エリアスがとりあえず手を出してみようと考える男性でなくて心底よかつたと、ルーチェは手の甲で火照った頬を冷やした。

「だって……殿下はあんなにも心配なさっていらっしやって」

「彼にとっての仕事なのよ。……病み上がりだから生地が厚いものにするわね。エリアス様とも露出を控えるとお約束したし」

「かしこまりました。では、ドレスのお色は殿下の瞳の色に合わせた深い青でよろしいでしょうか？」

「いいえ」

ルーチェはすっと立ち上がり、衣装棚を覗き込んだ。

衣装棚にはエリアスの瞳や髪の色に合わせた青や金のドレス、そのほか色気のある女性に見えるように大胆なカットイングが施されたドレスが大半だ。

「媚びるような装いは、もうやめよ」

「はあ。……では、何色に？」

タバサが驚いたように目を瞬かせてから、ルーチェの背中に懐疑的な視線を投げかけた。

「薄桃色に」

ルーチェは片隅に追いやられている薄桃色のレースがふんだんにあしらわれたドレスを手を取った。彼女の好みには合うけれど、エリアスの隣に並ぶには幼すぎると封印していたものだ。

「かしこまりました。……お嬢様がお選びになったものが、一番かと思えます」

タバサは若干戸惑ってはいるが、彼女らしく職務を全うすることに切り替えたようだ。

これまで口を開けばエリアス様エリアス様、真面目に過ごすのも勉強するのも全てエリアス王子のため——ある意味では非常にわかりやすく、そして扱いやすかったルーチェの急な変貌に使用人たち

が戸惑っていることを、もちろん彼女自身、察してはいる。

それでも今さら引くつもりはない。自分のこれからの人生がかかっているのだから。

「私……もう、大人だから。自分に似合うかどうかを優先するわ」

とルーチェはタバサに向かってにっこりと微笑んでみせた。

「おや、あそこにいるのはエドマンズ公爵令嬢ではないか」

王宮で、ひとりの貴族がルーチェの姿を発見した。

緑のあふれる庭園にひとり立つルーチェは、薄桃色のドレスと相まってまるで可憐な花の妖精のようだった。

近づく人がいないのが、なおさら説得力を増している。

「本当ね。ひとりでいらっしやるのは珍しい」

居合わせた他の貴族も、それに返事をする。

「ここ数日は伏せていたようだ」

「ああ、殿下が心配されて、足繁く公爵邸に通っていたそうだ」

「おや。殿下はあまり婚約者どのに興味がないのかと……」

「いやいや、まさか。城仕えの侍女たちは殿下が火遊びを好まないせいで立身出世の手立てがないと、最近ではあまり志願者がいないほどだ」

貴族たちがなやら会話しているのは聞こえているが、ルーチェは耳を傾けることはしない。良く

も悪くも公爵令嬢かつ王子の婚約者という身分が注目を集めるものと理解している。

エリアスと待ち合わせをせずにひとりで現れたなら、なおさら好奇の視線を集めるのも仕方がない。

（気にしない、気にしない）

ゲームではモブキャラたちがルーチェとエリアスの破局を面白おかしく語る。

それに比べれば、何も起きていない今なんて木々のざわめきと一緒だ。

（これからはひとりで生きていくと決めたのだから）

「ルーチェ、元気になったんだね」

「ひゃっ！」

背後からエリアスの囁きが降ってきて、ルーチェは短く叫ぶと同時にびくりと肩を上げた。

「心配したんだよ」

まるで後ろから支えるように、エリアスの骨張った手はルーチェの肩に置かれ、エリアスの頬は柔らかな栗色の髪の毛に触れている。

（ち、近い近い、近いっ！）

驚いたルーチェは身をよじってエリアスから逃れて、社交用の笑みを作った。

「え、ええ。もうすっかりよくなりました……」

「そう？ よかった」

なんの面白みもない、いつものやりとり。今まではここらあたりで「じゃあ、またね」となってエリアスは去っていくはずだった。

予想通りに会話は途切れたが、エリアスは変わらずにルーチェのそばにいる。
(な、なぜ?)

エリアスはまるで舞踏会の夜の出来事など何もなかったかのように、いつもと同じ優しい笑みを浮かべている。

遠目からは普段と変わりのない婚約者同士の語らのだが、長年エリアスと過ごしてきたルーチェだけが彼のわずかな異変を感じ取っていた。

「……私……本当に、もうすっかり大丈夫になりました」

デコルテに軽く手を添えて、ルーチェは礼儀正しく礼をした。

だが、その声色には以前のような甘えも、すぎるような熱もないことを、自分自身で感じ取っていた。

エリアスもどうやらその不審さに気が付いたらしく、ルーチェを穴が開きそうなほどにじっと見つめている。

「あ……あの……」

かつてないほどに強い視線を向けられて、ルーチェは怯む。

(お札の手紙は書いたし、待ち合わせの約束もしていないから、失礼にはあたらないはずなのだけけれど、エリアス様は怒っている……いえ、不審がっている)

「エリアス様。私、何か粗相を……」

「いや。今日は一段と可愛いと思って」

エリアスはふっと表情を緩め、にこりと微笑んだ。

「か、可愛い……ですか」

割り切ったつもりだったのに、ついつい褒められて照れてしまう自分が情けないと、ルーチェは思った。

「そんなドレスを持っていたのかと」

「ま、まあ、そう……ですね。本当は、こういったもののほうが好みなんです。でも、エリアス様には、ふさわしくない、ので……」

ルーチェの声は段々と小さくなっていく。

「そんなことはない。君の柔らかい髪色とよく馴染んでいる。これからは好きな色を着るといい」

エリアスはそのまま、何気なくルーチェの頬に触れようと手を伸ばしてきた。

「あっ」

ルーチェは反射的に一步、後ずさった。その動きはわずかだったが、エリアスの表情に一瞬、戸惑いの色が浮かんだ。

「ルーチェ……?」

「……なんでも、ありません……では、私、ご挨拶がありますので失礼しますね」

笑顔のままルーチェは彼に背を向けゆっくりと、それでいて明確に距離を取った。

「ルーチェ、待って」

エリアスは追いつがるようにルーチェのそばへ寄ると、控えめな声で問いかけてきた。

「僕、何かしたかな？」

低く抑えた声が、耳のすぐ近くで響いて、ルーチェの胸がどきりと揺れる。

「君の気に障ることをしたなら、謝る。どんな些細なことでもいいから教えてくれないか……」

「い、いいえ」

エリアスの言葉を、今度はルーチェが遮った。

「……エリアス様に不満など、あるはずありません」

「けれど、君は変わった。それは僕のせいなんだろう？」

エリアスの声はずかしく震えている気がして、ルーチェはぐっと息を呑んだ。

（……そう、私は変わった。でも、それはこちらの事情）

「きっかけなんて、何もありません。ただ少しいだけ、心境の変化がありました」

ルーチェは動揺を悟られぬよう、極力平静を装った。けれど胸のうちでは心臓がばくばくと跳ねている。

「……今までの私は、少し子どもっぽいところがありました。何かとエリアス様に甘えてばかりで……。けれど、私も先日成人いたしましたので今後は少し……節度を持った関係のほうがいいのかと」

それは飾りのない言葉だった。エリアスは眉をひそめたままだ。拒絶の言葉に聞こえて彼の不興を買ったのではないかとルーチェは気が気ではない。

「そ、それではエリアス様、ごきげんよう」

去ろうと背を向けた瞬間、腰に腕が回る。

抱き寄せられたのだと認識するまでに、少し時間がかかった。

紳士的すぎるほどに紳士なエリアスからそんなことをされた経験がないからだ。

「……エ、エリアス……様？」

何をなさっているのですか、と問いかけようとして、口がうまく動かなかった。

エリアスの手はしっかりと組まれていて、ルーチェはそこから抜け出すことができない。

（返事はないけれど……倒れたわけではないわよね）

「は、離して……ください」

「……行かないでほしい」

ルーチェが身をよじると、かすれた声が聞こえた。

（エリアス様のこんな声を聞いたのは、初めてだわっ……）

爽やかな初夏の空気とは裏腹に、空気はとても重い。

「ど、どうされたのですか、こんなところで。ほ、他の人が見えています」

人がいようといまいと、突然の接触に心が落ち着かないのに変わりはないのだが、そう言えば世間体を気にして離れてくれると思っていた。

しかしエリアスは離れない。

「婚約者同士が身を寄せ合っていたって、何もおかしなことはない」

ただの一般人ならそうかもしれないが、普段のエリアス——「王子」なら、絶対にこんなことはし

ないとルーチェは確信している。

(ど、どうして。エリアス様はずっと乗り気じゃなかったのに……)

あの夜から何かがおかしい。自分が距離を取ろうとしたことに勘付かれている——ルーチェにはそうとは思えなかった。

けれど、全てはもう、遅いのだ。ルーチェはエリアスから距離を取ると決めた。

「わ、私、次の用事が……し、失礼、します……!」

ルーチェは心を鬼にして、自分でもびっくりするぐらいの力でエリアスの腕を振りほどき、駆け出した。

会食会場のすぐそばには、ルーチェの父であるエドマンズ公爵が自領の森を模して作った散歩道があるのだ、そこに逃げ込むのだ。

「はあ……」

森歩きには適さないピロード張りの靴が汚れたころ、ルーチェは足を止めた。

目の前には人工の小川があり、せせらぎのそばには小さなガゼボがある。緑の蔦が生い茂っていて、遠目からはルーチェがここにひそんでいるようには見えないだろう。

「とりあえず、しばらくここに身を隠して、と……」

ガゼボの中のベンチに腰を下ろし、ふうと息をついたそのとき。

「ここにいると思った」

背後からエリアスの声が聞こえた。

「ひゃっ!」

ルーチェが振り向いたタイミングで風が前髪を靡かせ、こちらを見下ろすエリアスの瞳がよく見えた。

彼の顔には、いつもの穏やかさがなかった。記憶よりもやや鋭く、そして強い意志を感じさせる——射貫くような視線に思わずルーチェの背筋が伸びる。

「ど、どうしてここに」

「公爵家の領地にあるのと同じものだね。子どものころはよくここに隠れていただろう」

エリアスはガゼボに絡まる蔦の葉を撫でながらそんなことを言った。

(私の行動パターンはお見通し、ということ……? そんな子ども時代のことまで覚えられているとは思わなかったわ)

「そ、そうですね……確かに、ここは懐かしくて落ち着きます。少し休憩をしたら、私……」

「なぜ逃げるんだい、ルーチェ」

ありもしない用事をでっちあげようとしたのを、エリアスが遮った。

「なぜ、って……」

どんなに不審に思われようとも、説明はできない。

ルーチェがうつむくと、トン、と乾いた音が沈黙を破った。

(えっ)

柱のすぐ脇に、エリアスの手のひらがある。

ルーチェの逃げ場を塞ぐようにして、エリアスが立ちはだかっているのだ。

(わ、私、壁ドンされてる!?)

認識した瞬間、全身の血があつと熱くなる。おそらく、顔が赤くなっているのがエリアスからも見えているだろう。

立ち上がろうとベンチにつこうとした手を、エリアスの空いている手が掴んだ。

「…………」

顔を上げると、額と額がくつきそうなほどに、エリアスの顔が近くにあった。

逃げられない、とルーチェは思った。

離してくださいと懇願しようとしても、まるで喉がびったりと閉じてしまったように声が出せない。

「もし、あの夜、君を抱いていれば……状況は変わっていた？」

「な……何を、仰って……!」

ルーチェの返答に、エリアスは眉をひそめた。

「君があんなことを言ったのは、本心じゃなかったのか？ 僕をからかったと？」

「そ、それは!」

あの瞬間までは、確かに本気だったのだ。塩対応で自分に無関心なエリアスと結ばれる未来がないとわかって泣く泣く身を引いたのに、どうして今さらそんなふうに責めるような口調で言われなければならぬのか。

(だって、だって私は……)

「なら、意気地のない僕に愛想を尽かしたんだね」

「…………そういうわけでも……」

(どうしよう、エリアス様は自分が誘いに乗らなかったから私が拗ねたと思っているんだわ。これに私に愛想を尽かしてくださいださればよかったけれど、現時点ではまだ私は悪役令嬢ではないから、エリアス様も私のご機嫌を取るしかないのね)

エリアスの変質を、ルーチェはそのように解釈した。

ならば自分がこの場ですることはひとつだ。

「あ……あれは……冗談でした」

「冗談？」

「あの夜の言葉です。嫌われたくて、わざと……ふしだらなことを、言いました」

(悪役は、悪役らしく嫌われるべきよ)

ルーチェは極力、軽薄そうな笑みを作った。

「私、エリアス様に嫌われたかったです」

「なぜ」

「はしたないことを言えば、形式を重んじるエリアス様は私に呆れるでしょう？ だから、軽蔑されなかったんです、私。そうして、婚約破棄をもらうつもりでした」

ルーチェの手首を縛める力が緩んで、ルーチェはエリアスの体を押しつけるようにして立ち上がった。

「……本当に僕から離れるつもり？」

背中にかげられた声は怖いぐらいに真剣な色を持っていた。

「私ひとりが消えたところで、エリアス様の王太子の座は揺るぎません」

精一杯の慰めの言葉を口にして、ルーチェは足早にその場を立ち去った。

残されたエリアスは力なくその場に座り込み、じっと自分の手のひらを眺めていた。

木漏れ日に包まれた金髪碧眼の王子は絵になるが、彼の青い瞳には暗い光が宿っている。

「ルーチェ……どうして。今さら僕から離れるなんて……そんなの、認められるはずが、ない」

エリアスの言葉はとうにその場から逃げ去っていたルーチェに届くことはなかった。

第二章 出航

「やっばり、このままでは、まずいと思うのよ！」

会食会場から逃げ出したルーチェは再び部屋にこもった。

エリアスの様子がおかしい。

それは間違いないことだ。

ルーチェの知る限り、エリアスがあんなにも強引な言動をしたのは今回が初めてだった。

彼はどちらかと言うと引っ込み思案で、おとなしくて、教育係の言いつけを守る子——つまりルーチェとは正反対の性格で、成長することにその印象は強くなっていった。

「そ、それなのに……あんな……大胆な……」

ルーチェは火照った頬を、両手でぎゅっと押さえた。

心臓がどくどくと脈打っているのはときめきではなくて単純にびっくりしたただだと、必死に自分に言い聞かせる。

「もう、ぜ、絶対にあたりきりにならないようにしないと……！」

ゲームのストーリーが開始されるまで、もう時間はほとんどない。

できることならそのときには——エリアスが病に倒れるときには、自分はそばにいないほうがいいとルーチェは思っている。

もし近くにいたら、わかっているも何もできない自分が腹立たしくて嫌になってしまっただろうし、またしてもあやしい雰囲気になって、今度こそ流されてしまったら、全員が不幸になる。

「でも、エリアス様は立场上、婚約者としての私を手放すつもりはなさそう。となると……」

私室の物書き机に陣取って、ルーチェは腕を組んだ。

「身を隠すしかないわよね……」

机の上にはルーチェ宛の手紙の束と、きっちりと製本された革表紙の冊子が山積みになっていた。

新婚旅行の計画書だ。

来るべき日のためにルーチェがあれこれ苦心して作成したものが、今となってはそれらの旅程が実現することはない。

「私は悪役令嬢の運命から解放放たれて、平和に暮らしたいのよ……！」

ルーチェは恋を諦めて、保身に走ることに決めたのだ。かといって新しい恋をする気には到底なれないし、王子と婚約破棄になっただなんてあまりにも外聞が悪い。そうなると思ふと好条件の縁談もないはずだ。

家族はルーチェには甘い、独身でいることを許されるかどうかはわからない。

——となると、別に令嬢をやめてもいいかあ……。

前世の記憶を取り戻して、彼女の心は変質し始めていた。

大元の人格がルーチェであることには変わりないが、二十一世紀の日本人女性らしい思考——財産は潤沢、仕事だって選ばなければあるだろうし、もう好き勝手に生きていいんじゃないかしら？ という考えが頭をもたげる。

「エリアス様抜きで人生計画を考えなくちゃ」

さてどうしようかと、ルーチェはまず手紙の束の中、目についた叔母からの手紙を引っ張り出した。アウレリア王国から海を挟んだ場所に位置する隣国は、小さく島で構成されている。

母方の叔母ライラという女性がそのうちのひとつ、ドロロシア地方の領主に嫁いでいる。

彼女は数年前、留学先から戻る途中に乗っていた船が難破して、海に投げ出されてしまった。

荒波に呑み込まれて為す術なし、もう海の藻屑となって死すのみ……というところで、地元の勇敢な青年がライラを助けてくれた。

豊かな黒髪、焼けた浅黒い肌にはだらしがなく開いたシャツの隙間から覗く筋肉と、自分を抱き寄せるたくましい腕。

青年は海中からライラを引きずりだして、こう言った。

「こんな田舎にゃ、王子様はいないぜ、人魚さんよ」

温室育ちの令嬢だったライラにとって、そのぞんざいな物言いと野性的な瞳はあまりにも刺激が強すぎた。

ライラは彼が独身、そのうえ決まった相手がいないと知るや否や「この人と結婚する！」と心に決めてしまって、ドロロシアへの移住を決めた。

命の恩人がドロロシア領主の跡取り息子だとわかったのは、その後だ。

最終的にライラは領主夫人の座におさまることになったが、それは結果論にすぎない。

愛のためならば貴族令嬢の身分や安定した都会での生活など何も求めない、そんなライラの話を聞いて幼いルーチェは憧れもしたし、「自分の結婚相手が遠いところにいる人じゃなくて、幼なじみのエリアス様でよかった！」と安心もしたものだ。

遠くに嫁いだライラは帰ってくることはないが、こうして今でも姪っ子に手紙をくれる。

ルーチェはペリペリと封を開け、手紙に目を通した。

「たちの悪い流行病にかかってしまって、しばらく寝込んでいたわ。あなたも気を付けなさい」

という近況報告のあとに「新婚旅行の行き先は決まったかしら？ 田舎だけど、立ち寄っていただ

けたら嬉しいわ」と追伸と絵葉書が挟まっていた。

青い海と、白い砂浜。なだらかな斜面に立ち並ぶ石造りの家々は、王都では決して見られない風景だ。

「ドロロシアか……」

別の国なら、いかに王子といえどそう簡単に手出しはできない。

ライラは貴族女性にしてはだいたい活発で行動力のある人だから、説明すればかくまってくれるかもしれないし、うまくいけば親戚のよしみで仕事も紹介してもらえるかもしれない。なかつた。

「物理的に、顔を合わせられないようにする」

口に出してみると、それは名案に聞こえた。ルーチェには兄と姉がおり、自分ひとりが公爵家を出奔したからといって家が揺らぐことはない。

「悪役令嬢として追放されるぐらいなら、家出娘になるほうがまだマシよね？」

ルーチェは自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、ばらばらと新婚旅行の行き先リストを確認する。

そして、そのうちのひとつが目にとまった。

「豪華客船で海をぐるっと回り、さまざまな港街に停泊する三ヶ月の周遊ツアー、ドロロシア経由。船上で全ての生活が完結する……」

王子夫妻が乗り込むには旅程が長すぎて早々に候補から外れたものだ。

だからルーチェはエリアスにこの旅行の提案をしていない。

「これに乗り込んでいけば、安全じゃないかしら」

今は五月、ゲームのストーリーが開始されるのは七月だ。

つまり、あと二ヶ月でエリアスは病に倒れ、ヒロインが現れる。あとは愛と感動のエンディングへ

とまっしぐら。

その前に悪役令嬢として行動するのが不可能な場所——外界と隔離された豪華客船に避難する。

「ここにしましょう」

ルーチェは旅立ちを決め、こっそりとひとり分の旅行の申し込みをし、滞りなく旅券を手に入れることができた。

「よしよし。行き先が決まれば、あとは準備をひそかに進めるだけね」

ルーチェは机の引き出しに金の箔押しが美しくきらめく豪華旅客船のチケットをしまいこんだ。

「エリアス様の婚約者の身分にしがみつくのはもう卒業。ゆっくり、自然にフェードアウトして、そうして最終的に、私は姿を消すのよ」

ノックの音が聞こえて、ルーチェは独り言をつぶやくのをやめた。ほとんどなくしてタバサが入室してくる。

「お嬢様、お茶の用意ができました」

「ありがとうございます。そこに置いておいて」

給仕は不要よ、と言うとタバサはわずかに、主人に対する不敬にあたらない程度に眉をひそめた。

「……お嬢様。その、どこか……お心の調子がすぐれないのでは」

「え、ど、どうしたのよ急に」

つとめて明るく振る舞っていたつもりルーチェはたじろいた。

「最近、お嬢様は家にこもりがちでいらっしやいますよね。……王宮にも顔を出さないと、王子殿下が気にされていると公爵様が仰っていたのを小耳に挟みまして」

距離を取るのがあるからさますぎたかしら、とルーチェはぎくりとして、それらしき理由を探した。

「それは……あれよ。マリッジブルーなのよ、私」

「なるほど」

ルーチェの苦しい言い訳に、タバサはほっと胸を撫で下ろした。

「どうやら納得したようだった。」

「わかります、わかります。そういうえば、上のお姉様もそんな時期がありましたね」

「そうそう、そうでしょう」

ルーチェは姉が嫁ぐ前に重度のマリッジブルーだったことを思い出した。

「そういう家系なのよ。家族は性格が似るって言うしね。だから放っておいてちょうだい」

「かしこまりました。そうお伝えします」

誰に？ と尋ねる前にタバサはドアの向こうに消えていた。

「ま、良いわ。……準備を進めないといけないし」

ルーチェは机から便箋を三枚取り出し、羽根ペンを手に取った。

最初に書くのは家族への手紙だ。

「将来の王妃、そして国母となる重臣に耐えられそうにありません。ルーチェはエドマンズ家の令嬢としてふさわしくありませんので、どうか出来ない娘のことは忘れていただきますようお願いいたします」

ます……と」

これでセルフ追放は完成だ。家族仲は良いが、これで惜しまれるほどに素晴らしい人間でもないのは自分自身が一番よく理解している。

次の一枚はライラ宛の手紙だ。

「ご体調を案じております。お見舞いに伺わせてください。……これでよし、っと」

これで表向きの理由は完了だ。詳細は直接会って話せばいい。

そして、最後はエリアス宛の手紙だ。

「……さて、こっちは問題ね」

何を書くかは決まっている。家族への手紙と同じ内容でいい。

しかし、手が動かない。

（私が優雅な船旅を楽しんでいる間に、エリアス様はヒロインのクロエと出会い、心変わりする）

そしてルーチェの存在など、自然と忘れていくだろう。

どうせそうなるってしまうのだから、悲しいシーンは見ないほうがいい。

もしその場に居合わせてしまったら、自分から離れることを決めたのに、身を引き裂かれるような苦しみにとらわれるだろう。

お互いのためにこれが正解なのよと自分に言い聞かせながら、震える手でペンを取る。

『突然のご挨拶になってしまうこと、お許しください。王子妃の重臣に耐えられそうもなく、身勝手ながら婚約を破棄させていただきたく存じます。そして、少しばかりの間、旅に出ようと思えます』

これでいいかしら、とルーチェは書き途中の手紙をしげしげと眺めた。

「まるで内容のない手紙だわ」

公爵令嬢が王子を捨てて出奔するには、あまりに内容が薄い。

かといって本当のことを書いたら、それこそ心に不具合が起きたと思われるだろう。

「さすがにそれは避けたいのよね。もっとインパクトのあることを書かないと。ええと……そうね。

私は失望されたいと言った。その理由は婚約を破棄したいから……なぜなら、今の身分より大切なことがある。それは……」

もっともらしい理由を考えながら、ルーチェはライラから送られてきた絵葉書に目を留めた。

「これよ！」

ルーチェの脳裏に電流が走り、すらすらとペンが動いた。

『私、好きな方ができました。その人に会うために、この国を出ます。殿下におかれましては、これからますますお忙しくなることでしょう。どうか、ご自身のお体を大切に。私のことは——忘れてください。何もなかったような顔で、どうか笑っていてください。では、ごきげんよう。愛を込めて ルーチェ』

そう書いたあと、ルーチェはペンを止めた。

「……ごきげんようって、そんなに簡単にいくかしら。まあ、でも……この手紙を読むころには、私はもう船の上だし」

封蝋を押して手紙を仕上げると、ルーチェはぐっと拳を握った。

「気を取り直して頑張るのよ、ルーチェ。旅の途中でイケメンと出会って恋に落ちるとか、異国の謎めいた貴公子と結婚……とかも、ありえますからね？」

言葉は強気だが、胸の奥にちりちりとした痛みがあった。

それでもルーチェは未来を守るために、二週間後に日付を指定して郵便物の送付の手続きをした。

物語の世界から脱出するための準備は整い、決行当日——出発の日がやってきた。

ルーチェはこの二週間、エリアスとの距離を徹底して保っていた。

昼食の誘いにも、騎士団の見学にも、午後の茶会にも出席しなかった。

理由は全て「体調不良」あるいは「執務が立て込んでいて」で切り抜けた。

エリアスは基本的に放任主義だから、それらしい理由があれば追及するような人ではないとルーチェは経験から知っていた。

その予想通り、エリアスは会食での強引な様子はまるで幻だったのかと思うほどに、ルーチェのもとに押しかけることはなかった。

結果、顔を合わせることもめっきり減り、ついには一言も交わさない日が続き、城での舞踏会の日を迎えた。

それが今夜だ。

ルーチェが出発日を初夏の舞踏会にぶつけたのは理由があった。

今夜の舞踏会は一際盛大に行われる予定で、主だった貴族たちが一堂に会する。

ルーチェひとりがいなくても騒ぎにはならない。

裏でこっそりと旅立つには最適な日取りだったし、もちろん出航する貴族もいない。

だからルーチェはなんなく一等船室——スイートルームを予約することができたのだ。

自分がこれから働く「悪事」について胸が痛まないとさえ嘘になる。

けれどルーチェは今までの終わりが無い恋の苦しみとは違って、失恋の痛みはいつか癒えると知っている。

（これでいい。だってそう決めたのだもの、王子の心変わりや悪役令嬢になってしまいうぐらいなら、自ら彼の前から消えるの。それが私の生きる道）

「よし」

ルーチェは引き出しの中にある乗船券をもう一度確認してから、荷造りをする。

動きにくいドレスは旅に適さない。何着かは持っていくが、旅先で着用する服はこっそりと市街地で買い求め、船に積み込んでもらう手はずになっている。

生粋の令嬢であるルーチェのままであれば、こんな大それた行動を起こすことはできない。しかしルーチェの中に蘇った前世の記憶が、出奔へのハードルを大きく下げた。

ドレスは最小限、靴と本、そして換金しやすい宝石。

「……これも、一応ね」

子どものころにエリアスがくれた花を押し花にした葉も、本の隙間に忍ばせた。

ルーチェは何食わぬ顔で馬車に乗り込んだが、城に到着したあとはドレスの上に外套を着て、密かに城を脱出し、港までやってきた。

船に乗り込むまでに誰かに見とがめられるかと予測していたが、驚くほど円滑に事は進んだ。それがますます、ルーチェに自分の判断が正しいのだと思わせた。

「エドマンズ様のお部屋はこちらになります」

通されたスイートルームにはきちんと荷物が積み込まれていた。

足りないものはない。ないのだが、買い込んだ量以上の箱が積み込まれているような気が、ルーチェにはした。

「過剰な梱包も考えものね」

荷ほどきの手間を考えてうんざりしながらも、ルーチェは新たな旅路への期待をふくらませている。

「ま、時間はたっぷりあるし、いいでしょう。最後に夜景を眺めておこうかしら」

ルーチェは出航前に甲板から見える王都を記憶にとどめておこうと、甲板に出た。

冷たい風が心地よかった。それは心が解放されたせいもあるだろうけれど、とルーチェは思う。

ルーチェは手すりに両肘を寄せ、煌びやかな王都の明かりを見つめた。

光の中には、もちろんエリアスがいる城も含まれている。

「さようなら、エリアス様……」

誰に届くわけでもない声でつぶやいてから、城に向かって美しく礼をした。直接はできなかったが、別れの挨拶のつもりだった。

叶わぬ恋は諦めて、これからは自分のために生きていく。

その気になれば自分なんだからできるよ、ルーチェは信じている。

「……思ったより、冷えるわね」

びゅんと冷たい風が吹き抜けて、ルーチェは体を震わせた。

乗客の乗り降りが終わわり、船にかかっていた橋が収納されたのを見守ってから、ルーチェは部屋に戻ることにした。

部屋はもちろん、しっかりと鍵がかかっている。

鍵を差し込み、軽くひねってドアを開けた、その瞬間。

「ルーチェ、遅かったね」

部屋の中から聞こえてきた声に、ルーチェは足を止めた。

この船で最も豪華な一等客室は広々とした部屋で、白と金を基調にした華やかな内装に、大きなクローゼット、キングサイズのベッドがひとつ、備え付けの浴室には猫足のバスタブ。外に出て海を眺められるバルコニー付き。そしてティータイムのための小さなテーブルと、二人がけのソファがある。

そこに、優雅に腰掛け、足を組んでいる青年。

「……え？」

ルーチェは哑然として、声が出なかった。

けれど、彼の姿を見間違えるはずもなかった。

「今夜は冷えるから、また風邪を引いてしまうよ」

「エ……エリアス様……!？」

なんとエリアス王子が——ルーチェが捨てたはずの婚約者が、ルーチェの部屋に押しかけていたのだった。

「エ、エリアス様……な、なぜ……ここに……?」

密室の中で、ルーチェはなんとかそれだけ絞り出した。

舞踏会に出席しているはずのエリアスがなぜルーチェのスイートルームにいるのか、それは彼本人に尋ねなければわからないことだ。

「君がこの船に乗り込むことを、知っていた」

エリアスは薄い笑みをたたえたまま、すっと立ち上がった。

ルーチェは思わずびくりとする。エリアスの気持ちはわからないと思ったことは何度もあるが、こんなにも予想外の行動を彼が取ったのは初めてで、ルーチェの額には汗がにじんでいる。

「君の行動を、ずっと監視していたからね」

「……え？」

「ルーチェが僕を置いて旅に出るつもりだと知り、密かに君を追いかける計画を立てた」

「え、ええ……!？」